

営農だより 第1号

おいしいをつくりましょ。
富士伊豆農業協同組合

発行 令和7年3月5日
北駿産米改良推進協議会
JAふじ伊豆御殿場営農経済センター
TEL:0550-84-4820

- 目標 ①「米ぬか入り肥料」の施用により、循環型農業の実践
②粒張が良く、食味値80点以上の良食味米



いよいよ3月に入り育苗の時期となりました。寒暖差の激しい毎日ですが体調はいかがでしょう？2024年は記録的猛暑の年でした。静岡県内は水稲作況指数が95と低く、全国ワースト1位の結果でした。しかしながら当御殿場・小山地域では品質は安定し、食味・収量は例年を上回った結果となっています。水管理等、皆様のこまめな栽培管理の賜物です。今年の夏も再び猛暑となることが予想されております。天気予報をこまめに確認し、本年も環境に負けない米作りを行っていきましょう。

【育苗準備】

【種子消毒】薬液浸漬：種子粃 10kg の場合、水 20ℓ に対し（種1：水2）

- モミガードC水和剤→100g（200倍）
スミチオン乳剤→20ml（1,000倍）

種子は袋いっぱいに入れずに7分目程度にしましょう。

上記2種を混ぜて、種子が入った網袋を24時間停滞水で浸漬し、12～24時間風乾効果ムラが出ないよう、消毒中に網袋を2～3回攪拌します。浸漬後は十分陰干しし薬剤を固着させ、消毒後は水洗いせずに浸種作業に入ります。

【浸種】浸種の目安：積算温度 100℃＝日平均水温（10～15℃）×日数（10日以上）

- ①粃と水の容量比は1：2以上。たっぷりの水を使用しましょう。
- ②浸種時は薬剤が袋の内部に浸透するように、水中で種子袋をよく揉んでください。（吹き付け処理している薬剤を水に溶出させ、薬液を粃に染み込ませる。）
- ③浸種初めの3～4日の管理・・・薬液の効果を高めるために次の点を守りましょう。
(1)水温10℃以上を保つ (2)水を入れ換えない（循環しない静止水）
※浸漬後最初の24時間は水温10～15℃を必ず保つ。（絶対に水温10℃未満にしない）
- ④浸種4～5日以降の管理・・・発芽を揃えるため、次の点を守りましょう。
(1)浸種4～5日目以降は3日に1回水の入れ換えを行う（酸素を供給させる）。
(2)粃殻の外から胚の部分が透き通って見えるまで十分浸漬
※浸種期間の目安は積算温度100℃。（日平均水温13℃で8日間）

浸種直後の水温管理

浸種直後～24時間の低水温（10℃以下）で発芽率が低下します。

- 浸種直後～24時間の水温が適温（13℃くらい）
→その後水温が10℃以下になっても発芽率はあまり低下しない。
- 浸種直後～24時間の水温が10℃以下
→発芽率が低下しその後水温を上げて発芽率は戻らない。
（浸種時間を長くしても、ほぼ意味がありません）

※水温が上がりすぎてしまうと粃が十分に給水しないうちに芽が動いてしまい、発芽が揃いになる原因となります。気温が高い日は氷を入れるなどして、水温が上がらないように気を付けましょう。

浸種直後から～24時間は10～15℃の水温を保ってください。

【芽出し(催芽)】

◇催芽機で催芽する場合 カスミン液剤（細菌病予防）：水＝20ml：20ℓ
消毒液をハムネ催芽機に入れ、水温28℃×1.5日間循環させ芽出し（芽の出方で調整する）

◇風呂、その他で芽出しをする場合

30℃で芽出しをする。ハムネ状態に仕上げる。

もみ枯れ細菌病対策の為、催芽機の水温は28～30℃とする。

（32℃以上の高温にならないように注意する）



この状態で完了

【注意】 温度を確認しながら芽や根の伸びを確認しましょう。芽の長さは1mm程度。

【播種(種播き)】

◇培土使用量～使用量を間違えると、苗の生育に影響するので注意

「合成培土3号寒地用」床土1.8kg 覆土1.1kg 7.0枚/袋
「宇部培土」床土2.5kg 覆土1kg 5.7枚/袋

◇覆土前に十分に灌水する。（灌水量は、使用する培土によって異なる）

目安～床土を握って指の間から水がにじみ出る程度（一般的には、1ℓ程度/箱）

※灌水量が過剰だと発芽が悪くなり、不足していると粃の持ち上がりの原因となります。

播種時、下記の薬剤でカビによる立枯病も予防しましょう。（購入培土でも必ず使用）

薬剤名	薬量/水量	希釈倍率	散布可能箱数	灌水量	対象細菌
ダコレート水和剤	100g/60ℓ	600倍	120箱	1,000ml/箱	リゾープス菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌
ダコニール1000	100ml/80ℓ	800倍	160箱	1,000ml/箱	リゾープス菌
タチガレーズM液剤	100ml/50ℓ	500倍	100箱	1,000ml/箱	ヒシウム菌、フザリウム菌

※3種類からいずれか1種類を使用する

覆土後の灌水は、酸素欠乏を引き起こし、発芽障害の原因となるので絶対に行わない。

◇播種量 薄播きは健苗育成の第一条件です!! 播種量が多くては、健苗に育ちません!!

	播種期	播種量(箱あたり)		必要箱数
		乾粃	催芽粃	
稚苗	田植え前 18～23日	115g	150g	16～18箱/10a (3～4本植え)
中苗	田植え前 30～35日	85g	110g	21～22箱/10a (3～5本植え)

稚苗

育苗期間が短い（約23日）。使用箱数が少ない。

中苗

少ない播種量で1本1本が太く充実した苗。太茎となり将来的に穂揃いが良くなる。活着が良く、初期の段階で藻類に負けない。しかし育苗期間が長い。3.5葉（約35日間）の管理が必要。

【出芽】

～育苗器で出芽～

温度設定 28～30℃を目途に出芽させる。(30℃以上では、細菌病発生の危険性が高まる。)

※確認の為何度も育苗器を開けてしまうと、苗箱が乾燥し靱上がりの原因となります

～ハウス等で段積で出芽～

平らな場所に6～10段に積み重ね、シートなどで被覆し保温します。(日中の高温に注意)

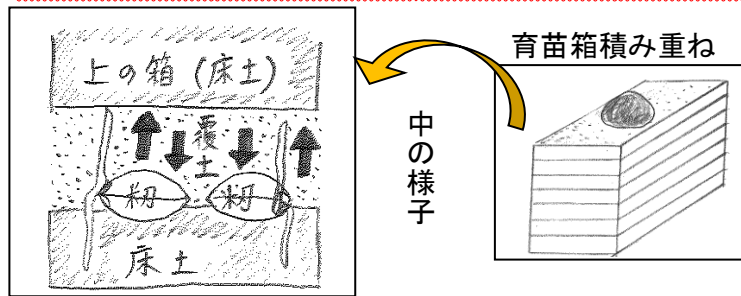
軟弱徒長苗にならないよう、育苗器内でうど芽を伸ばしすぎないようにしましょう。



これでも少し伸ばしすぎ。でも発芽揃いを考慮するとこのくらいが育苗器に入れておく限界伸長です。

靱が露出すると鞘葉部が乾燥するため、生育が遅れたり生育のバラツキの原因となります。

この時点で、うど芽を伸ばしすぎると、せつかく薄播きしても、良い苗はできません!!



※一番上の箱におもし(土のみを入れた苗箱等)をしておく、靱の持ち上がり予防になります。

靱上がりの発生について

- 【原因】
- ・ 播種時の灌水不足、培土水分が少なく根の伸長速度が速い(温度が高まり根の伸長が促進され、床土にスムーズに入り込まず靱自体が持ち上がる)
 - ・ 覆土が少ない

- 【対処方法】
- ・ 播種時にしっかり灌水する
 - ・ 根の急激な伸長を防止するため、浸漬、催芽、出芽時の温度に気を付ける
 - ・ 覆土の量を増やす(しかし覆土を増やし過ぎると水分が減少し、根上りを助長してしまうこともあるので気を付ける。)

出芽後、芽が出揃ったらハウスに拡げ、2～3日「ラブシート」を掛け緑化させる。

※ミラシート、シルバーラブのかけすぎに注意!!

晴天時、密閉状態のハウス内は1時間で10℃以上温度が上昇します。

焼き苗防止の為、外出する際は換気対策を十分に行いましょう。

※プール育苗では保温資材不要

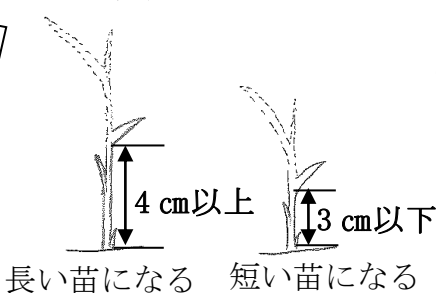
プール育苗では水位を均一に保ち、高温にならないように注意しましょう。

霜注意報が発令した場合は深水にしましょう。

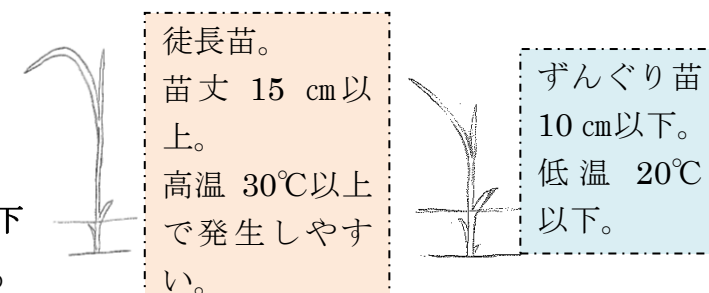
(緑化期以降であれば霜が降りなければハウスを開け放しても大丈夫です。)

1～2葉期(緑化期)を20～25℃の間で管理することが理想の苗形をつくる基本です。

[1～2葉期]



[2～3葉期]



【苗管理】

播種～	2～3日間	4～15日間	16日～田植えまで	
被覆	3日間を目途に出芽。ハウスに並べた箱からラブシートをかける。	約3日間被覆する。緑化終了の目安は第1葉が完全に展開した頃。	日中は被覆資材不要。夜間冷える時は早めにハウスを閉める。	
温度	昼	30℃	20～25℃	15～20℃
	夜	30℃	15～20℃	10～15℃
灌水	播種時に床土に1～1.2ℓ/箱程度灌水。	基本的には1日1回。雨の日は量を減らすか、やらない。	1日1～2回。14時頃までに灌水。夕方の灌水は夜温が下がり根張りが低下するため行わない。	
換気	30℃以上になる場合は換気を行う。	25℃以上の場合はハウスを開ける。	日中はハウスを全開にし、外気に慣らす。直接風が当たらないようにする。	
その他	うど芽の長さは10mm以内。長いと徒長苗になりやすい。	緑化し、第1葉が完全に展開したら徐々に日光に当てながら自然環境に慣らす。温度・水管理に気を付ける。	ハウス内の角等は灌水不足で葉が巻きやすいので注意する。苗の葉に異変を見つけた場合は速やかにハウスの外に出す。	
プール育苗		緑化期以降は湛水管理となり、昼夜とも窓は解放状態。霜注意報等で10℃以下が予想されない限りハウスを閉める必要はない。(緑化したら水を入れる。)		

＜苗の病気＞

◎出芽後、部分的に綿状のカビが発生することがあります。少量で、水をかけて消える程度であれば問題ありません。発生がひどい場合は最寄りの営農経済センターへご連絡ください。

病原菌	病徴・診断	農薬	発生条件
リゾプス属菌	発芽～緑化期初期に退色し生育が悪くなる。地面より上方に灰色のカビが一面に発生。	ダコレート水和剤	高温・過湿条件下で発生
フザリウム属菌	地際部の葉鞘が褐変腐敗し、白色又は淡紅色のカビを生じる。	ダコレート水和剤 タチガレエースM液剤	播種後低温にあったり、床土の乾燥・過湿の繰返しによる。
ピシウム属菌	地際部や根が水浸状に腐敗し、白い綿状のカビを生じる。	タチガレエースM液剤	低温・過湿条件下で発生。
トリコデルマ属菌	葉鞘や不完全葉が黄化・褐変・枯死し、靱や床土に白いカビを生じ、後に青緑色になる。	ダコレート水和剤	高温・過湿条件下で発生。

播種時にタチガレエースM液剤を施用した苗、JA育苗センターで購入した苗はタチガレエースM液剤は施用しないでください(JA苗は施用済みです)。また、ダコニール1000を散布した苗でタチガレエースM液剤を散布する場合は、ダコニール1000の散布10日後以降に行う(薬害発生の恐れあり)。

JAふじ伊豆御殿場地区では、JA共済の地域・農業活性化促進助成金を活用し、静岡製機株式会社の穀粒判別器を購入しました。令和7年度の農産物検査にて活用し、更なる米の品質向上を目指していきます。

JA共済の地域貢献活動

